

めぐみんさんになんて  
酷いことを…！

ギ  
ギ

こんな責め絶対に耐えて、  
2人で逃げ出すチャンスを見  
つけなきゃ…！

に  
ゆる

に  
ゆる

「まったく、なんという娘だ。まさか時間停止責めにこれほど耐えようとは…  
流石は王族と言ったところか。  
さっさとこの紅魔族の娘のように素直になれば良いものを。」  
「あんっ♡ アルダープ様に犯されて幸せです♡  
性奴隷がこんな良いものだなんて知りませんでした♡」  
「グワフ、ここまで大した健闘だったが、貴様が今居るのは落とし穴の底、  
触手の本体がいる培養装置の中だ。  
ここからの責めは不要になった性奴隷を廃人にして処分するためのもの。  
これまでとはまた次元が違うぞ？」

ギ  
スツ

うう…動きが今までより活発で…  
それになんだかさつきまでより  
身体が熱く…!

またあの頭が  
真っ白になるのが  
きちゃう…!

でも…これくらいなら…  
まだ大丈夫…!!

「身体が小刻みに震えているな。  
そろそろまた絶頂しそうなのだろう。  
先ほどからの責めで体力も消耗しているだろうに、  
その状態でまだ正気を保っているのだから  
大したものよ。」

＼＼  
＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼  
＼＼

!?

むじゅん

おふい

しゅん

どん

どん

ずりゅん

ずりゅん

やだっ!?! 粘液を無理やり口の中に...!?

か 身体が変に...っ これダメ...っ!!

「先ほどまでと比べて身体の感度が更に上がっているのが分かるか? そう、本体から分泌される粘液は触手の先端から吐き出されるものと比べ濃度が比では無いのだ。培養装置の底に充満した気体を吸ったただけでその状態なのだ。」  
それを口から直接摂取したならば...グフッ





モ

ずちゅ  
ちゅ

ずちゅ  
ちゅ

ずちゅ  
ちゅ

いっゅ  
いっゅ

いっゅ  
いっゅ

いっゅ  
いっゅ

ク  
ク  
ク

「そしてここで時間停止だ！  
高濃度の粘液を飲ませつつ、  
イク寸前の感度が最大の状態で性器を  
同時に責めつくし、快感を蓄積させる…  
停止解除時にどれだけの快感がその身体を襲うか…  
普通の娘なら一度で即壊れるところだが…」



ピン

わたっ

ピン

まけなっ

ピン

ピン

「ほほう！ 激しくイッたようだが、壊れてはおらんようだな。やはりひと筋縄ではいかんか。だが、時間はまだまだたつぷりとある… 貴様が屈服するまで何回でも繰り返してやるぞ。幸い、時間をつぶす相手もおるしな。」  
「アルダープ様♥ おちんちん綺麗にしました♥ 早く♥ またこの発情メスマンコに入れてください♥」  
「ほほう、早速教えたおねだりが出来るようになったようだな。どれ、今度は気絶するまで犯してやるぞ。」

数日後…

す…  
すみませんでした…

「ようやく折れよったか。しかしまさかこの責めですらここまで耐えるとは、想像しておらんかったわ。とはいえもうその身体ではまともな生活は送れまい。まあ心配するな。ここからはお望み通り貴様もメス穴として貪り食ってやる…」  
ワシが飽きるまでの間ではあるがな…ククク」

カカ  
カク

ぶーっ

ぶーっ

カカ  
カク

ガ  
ガク

ガ  
ガク

これいじょうは  
ほんとうにこわれ…っ

なんでもいうとおりにっ  
しますから…っ

もうゆるしてくださいいい!!



めぐみんさんになんて  
酷いことを…!

にゅる

「まったく、なんという娘だ。まさか時間停止責めにこれほど耐えようとは…  
流石は王族と言ったところか。  
さつさとこの紅魔族の娘のように素直になれば良いものを。」  
「あんっ♡ アルダープ様に犯されて幸せです♡  
性奴隷がこんな良いものだなんて知りませんでした♡」  
「グワフ、ここまで大した健闘だったが、貴様が今居るのは落とし穴の底、  
触手の本体がいる培養装置の中だ。  
ここからの責めは不要になった性奴隷を廃人にして処分するためのもの。  
これまでとはまた次元が違うぞ?」

ギキ

こんな責め絶対に耐えて、  
2人で逃げ出すチャンスを見  
つけなきゃ…!

にゅる

ギキ



うう…動きが今までより活発で…  
それになんだかさつきまでより  
身体が熱く…!

またあの頭が  
真っ白になるのが  
きちゃう…!

でも…これくらいなら…  
まだ大丈夫…!!

「身体が小刻みに震えているな。  
そろそろまた絶頂しそうなのだろう。  
先ほどからの責めで体力も消耗しているだろうに、  
その状態でまだ正気を保っているのだから  
大したものよ。」

＼＼＼

＼＼＼

＼＼＼

＼＼＼

＼＼＼



!?

むじゅ

おふい

やだっ!?! 粘液を  
無理やり口の中に...!?

か 身体が変に...っ  
これダメ...っ!!

「先ほどまでと比べて身体の感度が  
更にながっているのが分かるか？  
そう、本体から分泌される粘液は触手の先端から  
吐き出されるものと比べ濃度が比では無いのだ。  
培養装置の底に充満した気体を吸っただけで  
その状態なのだ。」  
それを口から直接摂取したならば...グワッ

びゅん

びゅん

びゅん

ずりゅん

ずりゅん

びゅん

びゅん





モ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

いっゅ

いっゅ

いっゅ

クッ

「そしてここで時間停止だ！  
高濃度の粘液を飲ませつつ、  
イク寸前の感度が最大の状態で性器を  
同時に責めつくし、快感を蓄積させる…  
停止解除時にどれだけの快感がその身体を襲うか…  
普通の娘なら二度で即壊れるところだが…」



カ  
ネ  
ツ

あ  
に  
!

ガ  
ン  
ツ  
ビ  
ュ

ガ  
ン  
ツ

カ  
ン  
ツ

あ  
に  
!

ト  
ン  
ツ

ト  
ン  
ツ

あ  
に  
!  
!!  
?

ピン

わたっ

ピン

まけなっ

ピン

ピン

「ほほう！ 激しくイつたようだが、壊れてはおらんようだな。やはりひと筋縄ではいかんか。だが、時間はまだまだたつぷりとある… 貴様が屈服するまで何回でも繰り返してやるぞ。幸い、時間をつぶす相手もおるしな。」  
「アルダープ様♥ おちんちん綺麗にしました♥ 早く♥ またこの発情メスマンコに入れてください♥」  
「ほほう、早速教えたおねだりが出来るようになったようだな。どれ、今度は気絶するまで犯してやるぞ。」

数日後…

す…

すみませんでした…

「ようやく折れよつたか。しかしまさかこの責めですらここまで耐えるとは、想像しておらんかつたわ。とはいえもうその身体ではまともな生活は送れまい。まあ心配するな。ここからはお望み通り貴様もメス穴として貪り食つてやる…」  
ワシが飽きるまでの間ではあるがな…ククク」

カカカ

ぶーっ

ぶーっ

カカカ

ガガガ

ガガガ

これいじょうはほんとうにこわれ…っ

なんでもいうとおりにっ  
しますから…っ

もうゆるしてくださいいい!!



めぐみんさんになんて  
酷いことを……!

にゅる

「まったく、なんという娘だ。まさか時間停止責めにこれほど耐えようとは……  
流石は王族と言ったところか。  
さつさとこの紅魔族の娘のように素直になれば良いものを。」  
「あんっ♡ アルダープ様に犯されて幸せです♡  
性奴隷がこんな良いものだなんて知りませんでした♡」  
「グワフ、ここまで大した健闘だったが、貴様が今居るのは落とし穴の底、  
触手の本体がいる培養装置の中だ。  
ここからの責めは不要になった性奴隷を廃人にして処分するためのもの。  
これまでとはまた次元が違うぞ?」

ギキ

こんな責め絶対に耐えて、  
2人で逃げ出すチャンスを見  
つけなきゃ……!

にゅる

ギキッ

うう…動きが今までより活発で…  
それになんだかさつきまでより  
身体が熱く…!

またあの頭が  
真っ白になるのが  
きちゃう…!

でも…これくらいなら…  
まだ大丈夫…!!

「身体が小刻みに震えているな。  
そろそろまた絶頂しそうなのだろう。  
先ほどからの責めで体力も消耗しているだろうに、  
その状態でまだ正気を保っているのだから  
大したものよ。」

＼＼  
＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼

＼＼  
＼＼



!?

むじゅん

おふい

びんぎん

びんぎん

びんぎん

びんぎん

びんぎん

ずりゅん

ずりゅん

やだっ!?! 粘液を無理やり口の中に...!?

か 身体が変に...っ これダメ...っ!!

「先ほどまでと比べて身体の感度が更に上がっているのが分かるか? そう、本体から分泌される粘液は触手の先端から吐き出されるものと比べ濃度が比では無いのだ。培養装置の底に充満した気体を吸ったただけでその状態なのだ。それを口から直接摂取したならば...グフッ」





カ  
ネ  
ツ

あ  
に  
!

ガ  
ツ  
ビ  
ュ

ガ  
ツ

カ  
ツ

ツ  
ツ

あ  
ッ

あ  
ッ  
!!?

ト  
ツ

ト  
ツ

ピン

わたっ

ピン

まけなっ

ピン

ピン

「ほほう！ 激しくイつたようだが、壊れてはおらんようだな。やはりひと筋縄ではいかんか。だが、時間はまだまだたつぷりとある… 貴様が屈服するまで何回でも繰り返してやるぞ。幸い、時間をつぶす相手もおるしな。」  
「アルダープ様♥ おちんちん綺麗にしました♥ 早く♥ またこの発情メスマンコに入れてください♥」  
「ほほう、早速教えたおねだりが出来るようになったようだな。どれ、今度は気絶するまで犯してやるぞ。」

数日後…

す…

すみませんでした…

「ようやく折れよつたか。しかしまさかこの責めですらここまで耐えるとは、想像しておらんかつたわ。とはいえもうその身体ではまともな生活は送れまい。まあ心配するな。ここからはお望み通り貴様もメス穴として貪り食つてやる…」  
ワシが飽きるまでの間ではあるがな…ククク」

カカカ

ぶーっ

ぶーっ

カカカ

ガガガ

ガガガ

これいじょうはほんとうにこわれ…っ

なんでもいうとおりにっ  
しますから…っ

もうゆるしてくださいいい!!

